

## 33-1 家族とのかかわり

## 長期入院患者とその家族の思いを知る～失語症とのコミュニケーションを試みて～

1 群馬パース病院 看護部, 2 群馬パース病院 診療部

ひろせ まさえ

○廣瀬 正江 (准看護師)<sup>1</sup>, 新井 智春<sup>1</sup>, 中島 都<sup>1</sup>, 加藤 積良<sup>1</sup>, 関 妙子<sup>1</sup>, 國元 文生<sup>2</sup>

## 【目的】

失語症の患者の孤独や苦痛を理解するために、コミュニケーション方法を工夫することで思いや希望を捉えることができないか、また家族は患者についてどのように受け止めているのかを把握したいと考えた。患者と家族の思いと併せて双方の思いに寄り添った援助を行うことで、患者に精神的な満足感を得てもらうことを目的とした。

## 【方法】

対象：A氏 48才男性 脳血管障害による失語症

アプローチ

- 1) 現在のコミュニケーション方法の改善
  - ① 文字盤の文字の大きさを見やすくする
  - ② 表情を工夫したり身振りを添える
- 2) 新たなコミュニケーション方法の試み
  - ① 痛みのスケールを利用する
  - ② アイコンタクトがもつ意味を統一することで意思表示を明確にする
- 3) 家族からの情報収集
  - ① 家族の面会時には積極的に話しかけコミュニケーションをとる
  - ② A氏からの希望を伝える

## 【結果】

- 1) 文字盤を使用するときも、あらかじめ答えの選択肢を多く用意することで疲労感を軽減することができた。
- 2) コミュニケーションノート活用により身体的苦痛を把握しやすくなった
- 3) アイコンタクトを統一することで意思疎通がスムーズに行えるようになった
- 4) A氏の希望は、①テレビを見たい②何か食べたい③外に出てみたいであった。①に対しては、家族に希望を伝えることでテレビを設置することができた。②に対しては、STに相談しジュースを少し口に含む経験をしてもらうことができた。③については、天気の良い日に車椅子に乗車して屋外へ出ることができた。車椅子乗車時の背部痛についてはコミュニケーションノートにより把握しやすくなった。

## 【考察】

コミュニケーションの工夫により、A氏の表出した思いや希望を捉えることができ、ニーズに合った援助につなげることができたと考える。患者が苦痛なく穏やかな入院生活を送れることは、家族の安心、喜びにつながると考える。